Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-18

自己愛的甘えに関する理論的考察

稲垣, 実果

(Citation)
神戸大学発達科学部研究紀要,13(1):1-10

(Issue Date)
2005-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81000628

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000628

神戸大学発達科学部研究紀要
第13巻第1号　2005

研究論文

自己愛的甘えに関する理論的考察

A Discussion of Narcissistic "Amae"

稲　垣　実　果*
Mika INAGAKI

要約：本論文では，まず初めに，Freud からFerenczi，Balintに至る精神分析的歴史を概観する中で，Freudの自己愛概念の定式化から，自己愛の発生を受身的対象愛の問題とする変遷について論じ，受身的対象愛と土居の「甘え」概念の間に共通性があることについて指摘した。次に，「甘え」理論について概説し，「甘え」の定義，「甘え」の多義性，素直な甘えと屈折した甘えなどについて説明した。そして，「甘え」理論と自己愛理論との関係について論じ，Freudの自己愛理論に対する土居（2000b）の批判を紹介した上で，土居（2001）が提唱した「自己愛的甘え」の性質について理論的に考察した。さらに，自己愛的甘えは，稲垣（2004）が示した「屈折的甘え」「配慮の要求」「許容への過度の期待」の3つの概念から捉えうることを論じた。最後に，自己愛的甘えにまつわる問題として，甘えの二重性を持てないことや，「幻滅」としての甘えのあきらめの問題などについて触れ，Winnicottの理論的観点から，自己愛的甘えに関して対象関係論的に考察した。

Ⅰ　精神分析理論の歴史と「甘え」

1．Ferencziの発達論

精神分析の歴史的発展は，Freudの時代と，Freud以後現在に至る時代に大別される。しかし実際にはすでにFreudの時代に新しいいくつもの流れが生まれている。Freudは1895年から1916年ぐらいまでのあいだに治療方法と理論としての精神分析を確立したが，その途上でFreudと弟子達のあいだに，さまざまな相互作用が起こった。その一つに，1910年代から1920年代に，基本的にはFreudの枠組みの中にとどまりながらも，それぞれ独自の理論的展開を示した弟子達の流れがある。なかでもFerencziは，Freudに対抗する革新的な着想を生み出し，Freud以後の精神分析の理論と技法論に新しい動向を与えた（小此木，1985）。彼は，Freudの精神分析療法をより能動的，かつ柔軟なものにし，この試みによって治療効果を増大させ，治療の拡大をはかる努力と，Freudに比べてより早期のエディプス期以前の発達段階と母子関係の交流に精神分析理論の力点を置き換えようとした。Ferencziの精神療法上の基本態度としては，現在，いま，ここの治療状況を重視し，治療者が患者に向ける人間的愛情を強調し，さらに技法の能動性と柔軟性に工夫をこらして，精神分析的な精神療法に多大の影響を残した。例えば，Freudが転移を言語的解釈と洞察によって解決することに限定したのに対して，Ferencziは分析医が患者に誠実さ，受容，人間的愛情を向ける現実的機能そのものを重視し，そのような治療関係体験そのものが転移の中で再生される歪んだ幼児期の対象関係を再構成する力を持つと考えた。

このようにFerencziは，Freudが前提としていた外的な現実存在としての母親の役割を，もっと積極的にその理論構成の中に取り入れようとし，Freud以後の精神分析における母子関係の重視と，自我発達におけるその現実的な役割を研究した。Freud（1911）によれば，人間の最も初期の段階である快楽原則が支配している段階から，やがて現実原則に従って，この快楽原則の支配する心理過程を抑圧する段階に到達する。しかし，Freudは夢，神経症の症状，幻想，神話などにあらわれる快楽原則の支配する一次的段階から，現実原則に従う合理的思考と認識の支配する二次的段階に，心的なものがどのような移行段階を経て発達してゆくかについては明らかにしなかった。

Ferencziは，一次的段階から二次的段階への移行過程における中間的な段階を「現実感の発達段階」とよんだ。そして，彼は，自我の発達，現実検討の発達，運動行動による外界支配力の成長が，このような移行の動因になるとした。快感原則が全面的に支配する発達初期の段階では，現実への認識を欠くために，かえって主観的な全能感が大きい。つまり，現実感の発達と全能感の縮小は比例関係を持つとしたのである。しかも，このような全能感と現実感のあり

＊ 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程

（2005年4月15日　受付
2005年8月1日　受理）

方は，乳幼児自身の自我発達と，それぞれの発達段階に応じた母親のかかわりという二大要因によって決定される。小此木（1985）は，この意味で個体論的発達図式と見誤られがちのFreudの心的発達論に潜む母子間のコミュニケーション機能に対するFreudの認識を積極的に取り出し，これに具体的な内容を与え，Spitz，Winnicott，Mahlerらの母子関係論へと媒介した点にFerenczの大きな功績があったと述べている。また，渡辺（1995）も，Ferenczは，Freudがエディプス・コンプレックスを中核に据えて理論化した精神分析の辺縁に置かれていた母親の役割を，もっと積極的にその理論構成の中に取り入れようとしたという点で，母子関係の重視と，乳幼児の自我発達における母親の役割の研究の先鞭をつけたものとしてFerenczには価値があると述べている。

Ferenczは，①無条件の全能感の段階，②魔術的幻覚的全能感の段階，③魔術的身振りによる全能感の段階，④魔術的思考と言葉による全能感の段階，の四つの段階を経て，現実感が発達してゆく過程を明らかにした。小此木（1985）は，このFerenczによる幼児的な現実感の発達の四段階を以下のようにまとめている。

①無条件的全能感の段階…胎児の保護や温かさや栄養を全て母親から与えられ，本能の満足が常に与えられるために，胎児は何も望む必要は無い。自分は全能だ，望むものは全てかなえられる，という段階である。

②魔術的幻覚的全能感の段階…新生児は自分自身では絶対的に無力な存在である。しかもこの自我の最も原始的な状態は，Freud（1900）が「夢判断の心理学」の中であきらかにしたように，即時に得られない願望の幻覚的満足を得ることで快楽原則の支配を全うする。新生児が幻覚的方法（むずがったり叫んだりする）で得る全能感は，まだ自分が胎内にいるのと同じような保護と安定を得ているという錯覚である。実際にそのような全能感は，母親の存在と活動によって与えられているのに，新生児はこのことについてまったく何も知らないという段階である。

③魔術的身振りによる全能感の段階…やがて願望の充足が得られない場合に，子どもが泣き叫んだり，むずがったりすることが母親の注意を引き付け，子どものこのような運動の放出が魔術的信号として用いられるようになる。願望は発達と共に特殊化してゆくが，それと同時にその願望の表現も特殊化してゆく。例えば，摂食をしたいと思うときに，口をパクパクさせたり，欲しいと思う対象に手を伸ばしたりする。このような身振りによって願望を表現すると，母親はその願望を満たしてくれるという感情を抱く段階である。

④魔術的思考と言葉の段階…次の段階になると，子どもは自分の願望や自分の求める対象を言葉と結び付けた表象の形で思い浮かべ，さらにそれを口にすることによってそれを表出する。身振りが目の前の直接的な対象にしか，かかわることが出来ないのに対して，言葉によって時間的にも空間的にもこうした制約を超えた対象とのかかわりを表現し，それらに対する願望を表出することができるようになる。このようにして表象機能が発達してゆくが，そのためには子どものこうした言葉による表出が意味するものを，母親が読み取ってその願望を満たすようなかかわりが必要である。そしてこの経験は，子どもに自分自身が思考と言葉を表出することだけで，願望を満たすことのできる魔術的能力を持っているという錯覚を引き起こす。例えば，強迫神経症の患者における魔術的身振りへの迷信的期待や誇大的な全能感は，こうした魔術的身振りや思考の段階への退行として理解される。

Ferenczは，この四段階を経て自我の知的能力や運動機能が発達するにつれて現実感が相対的に発達し，それとともに全能感は減少してゆくと考えた。

以上のように，快楽原則から現実原則へ，全能感から現実感へという移行過程を，対象関係論における一者関係から二者関係への移行段階としてとらえるならば，魔術的身振り・言葉による全能感は，母親によって差し出される適切な支持との一致によって成立する錯覚の意味を持つ。そして，小此木（1985）は，この認識は，Winnicottの錯覚—脱錯覚論の起源をなすものではないかと述べている。また，Ferenczは，Freudが最初，強迫神経症の思考の全能について明らかにした，内的主観的な空想が思考の外的客観的な現実に対して優位であるという信仰，外界を自己の願望のままに支配しようとする全能的コントロールの優勢，そしてこの全能的支配に制限を加えてゆく自我の現実検討機能の未発達などの精神状態が，正常な心の発達の初期の段階でも普遍的にみられるという観点をあきらかにすることによって，自我機能の各発達段階と精神病理学的状態の関連を系統づけた。

このように，Ferenczは自我発達（身振り，言葉，思考の象徴機能の発達）が，子どもの側の表出を信号として読み取る外的な対象としての母親の機能によって初めて可能になるという，Freudにおける母子関係のコミュニケーションと自我発達の相互性の認識を明確化し，FreudとSpitz，Mahler，Erikson，Winnicottらの研究を結ぶ役割を果たした。

2．受身的対象愛と「甘え」

前述のように，FerenczはFreudのリビドー論を対象関係論的な枠組みの中に統合し，Freud以後の精神分析における母子関係の重要性と，自我発達における現実的な役割（現実感の発達段階などの外界支配力の成長）について研究した。そして，精神分析の中で最初に「受身的対象愛（passive object love）」を提唱した。Ferenczによれば，最初の愛情対象＝乳房は，母親（対象）から与えられるという意味で，乳児の側にあるのは，最初の受身的対象愛（primary passive object love）であると述べている（Ferenczi，1924）。そしてこの受身的対象愛は，「現実感の発達」の中でFerenczが"乳児の全能感を支える母親の愛"と述べたものと表裏をなしている（小此木，1985）。

Balintは，Ferenczからの教育を受け，Balint独自の「受身的対象愛」の定義づけを試み，さらにこの考察を自己愛論へと結び付けた。もともと，精神分析において，自己愛ないしはナルシシズム（narcissism）という概念は，Freudによる，精神分裂病をリビドー（libido）論で解釈しようとする試みから生まれた。リビドーとは，性欲動という生得的な精神的エネルギーのことで，これによって彼は心的活動を説明しようとした。彼は，精神分裂病は，リビドーが外界から引き離され，内界の自我そのものに向けられるというものであるとし，その状態をナルシシズム（自己愛）と呼んだ。つまり，対象関係からリビドーが撤退することがナルシシズムであり，彼が

述べた「自己愛神経症」とは，分裂病性の自閉の状態だったのである。自己愛を分裂病の状態と等しいと考えるこの議論は，一般には普及しなかった（岡野，1998）。しかし，Freudのナルシシズム理論は分裂病論だけには留まらず，ナルシシズムに関する概念を展開させていった。そして彼は，「一次的ナルシシズム」は赤ん坊が自分の体の一部を愛情対象とする「自体愛」の時期から，他人を愛情対象とする「対象愛」へ移行する際の，両者の中間に位置する過渡的な段階として考えたのである。このように，リビドーが自我に引き上げられる前，そもそも外界の対象に振り向けられる前，自他の区別が未分化な時期に自我の中にこもっている状態を，「一次的ナルシシズム」とし，これに反して精神分裂病のように，発達後，本来は対象に向けられるべきリビドーが自己へ充当された結果起きるものを，「二次的ナルシシズム」と呼んだ。したがって，Freudは自己愛の状態においては，対象関係は成立していないと考えたのである。

これに対し，Balint（1965）は，自己愛を対象関係論的に理解し，受身的対象愛が，精神の最初の働きであるとした。この受身的対象愛とは，母から自己が受身的に愛されることを求める情緒的な愛情要求で，対象を愛するというのではなく，対象に愛されたいと思う心の働きである。彼は，このような対象関係は，かなり早期の発達段階にみられ，受身的対象愛を一次的対象愛，原始的対象愛と考えた。そして，Freudのいう，対象関係の成立していない「一次的ナルシシズム」を批判し，対象に愛されたいという欲望が一次的なものであることから，受身的対象愛を一次愛，原初愛とも呼んだ。また，Balint（1965）は，このような受身的対象愛の目標を"私は愛されるべきであり，満足されなければならない，しかも私の側からは何もお返しをしなくてである"（邦訳書，1999，p98）と述べている。さらにBalint（1965）は，この目標が直接達成されない場合の迂回路として，"もし世界が私を十分愛してくれず，十分満たしてくれないのなら，私は自分を愛し，自分を満足させなければならない"（邦訳書，1999，p98）という自己愛をあげている。実際，彼が臨床上で観察するナルシシズムは必ず，悪い対象や言う通りにしてくれない対象に対する防衛であった。

以上のように，Balintは受身的対象愛を対象希求的なものであるとし，ナルシシズムの発生はこの受身的対象愛に関係すると考えた。このような，母子関係の対象関係論的な洞察や，受身的対象愛の概念は，土居の「甘え」概念を，Freud以後の精神分析理論の流れに位置付けるうえで，重要な役割を果たすことになった（小此木，1985）。

土居（2001）は，もともと「甘え」は，母親を求める乳児について「この子はもう甘える」というように，非言語的な心理を示していると述べており，甘えは明らかに乳児の心理と結び付いている。これは，相手に対する受身的態度であり，愛情を受動的に要求するという特徴を持っている。また，土居は，"Balintが受身的対象愛という用語で示したものが，甘えたいという欲望以外のなにものでもないことは明らかであろう"（土居，2000a，p15）と述べている。このように，両者は受身的特質を持ち，一次的で生得的なものとして，共通に位置付けることができる。

また，Balint（1965）は，分析の仕事が深い段階まで進むと，しばしば患者たちが原始的な願望を充足させることを期待し，要求するという体験から，患者の願望は対象指向的であると述べている。さらに，治療の最終段階になると，患者は今まで忘れていた幼児的本能的願望を表現し始め，周囲がその願望を満たしてくれることを求めるようになると述べている。つまり，幼児的本能的願望を満たすことができるのは，外的世界，周囲だけであり，自体愛的，ナルシシズム的に解消することは不可能であるという事である。さらに，Balint（1965）は，幼児的本能的願望を満たして欲しいという，受身的対象愛の満足が適切な瞬間に適切な程度で達成された場合には，その満足の経験は非常にひっそりと起こるため，ほとんど目に止まらない微弱な反応になると述べている。この快の体験は，いうことなしという静かな穏やかな感覚と表現できるが，もしこの願望が満たされないままにされるならば，満足が熱烈に求められ，その結果生じる欲求不満は，激しい反応を引き起こす（Balint，1965）のである。このように，Balintは，受身的対象愛が，満足の中では静穏であり，不満によって激しい反応を引き起こす性質を持つと考えた。そして，土居の「甘え」も，満たされた時に静かに沈黙しているが，満たされないとわがままで要求がましい，厄介な形で表に出てくるという性質を持っている。

以上のように，「受身的対象愛」と「甘え」は，非常に近い概念であり，共通性がみられる。

Ⅱ 「甘え」理論

1.「甘え」の定義と日本社会における「甘え」の重要性

「甘え」とは，その「甘え」という単語が日本にのみ存在するという事実から土居（1971）によって指摘された概念であり，日本人の心理の鍵概念であるとされている。

土居（1971，2000a）は，『甘え』とは，「他者の好意に依存し，それをあてにする」ことを意味し，語源的には味覚を示す「甘い」と結び付いていると説明している。つまり，「甘える」という語には「甘さ・優しさ」という感覚があり，乳児の精神がある程度発達して，母親が自分とは別の存在であることを知覚した後に，その母親を求めることを指していう言葉であると述べている。このように，甘え始めるまえまでは，乳児の精神生活は母子未分化の状態であるが，精神の発達とともに自分と母親が別の存在であることを知覚する。そして，その別の存在である母親が自分に欠くことのできないものであることを感じ，母親に密着することを求めることが「甘え」であるといえる。また，この「甘え」は，子どもが必ず世話をしてくれるし，母親も子どもが世話に応えてくれるという相互的な信頼があって成り立つものである。この信頼関係がなければ，子どもは甘えられなくなり，甘えは成立しないのである。

さて，このような乳児が母親に「甘える」という現象は東洋・西洋を問わずみられるものである。ところが，この語は，成人同士の関係を表現するときにも用いることができ，この場合の日本語に相当する英語の単語はない。このことは，「甘え」の心理が英語圏の国民には全く未知の心理であるということなのではなく，日本社会では甘えたいという欲求を表現することが社会的に許容されているということであると土居（2000a）は述べている。つまり，日本社会においては親への依存が育まれ，そしてこの行動パターンが社会構造にまで制度化されているのに対し，西欧社会においては，そう

でない傾向が一般的なのである。

このことは，日本人が対人関係主義の傾向が強いことと関連している。Johnson (1993)など，多くの論者も述べているように，日本人の間では個人意識や自己呈示よりも，人間関係における役割の組み合わせ，相互作用的な行為，状況によって異なる文脈の中で詳細に決められている社会的活動などから概念化されている自己が重視されている。これは，日本人には個人という意識がないということではなく，自己呈示において，個人の存在や潜在的な行動についての意識は，状況によって異なる特定の文脈における他者との対人関係的結び付きを基にして形作られるのである (Johnson, 1993)。その中で社会化されるにつれて儀礼的な謙遜や謙譲や自己誇大感の否定（「遠慮」）を身に付けるが，その代わりとして一時的な自己愛（愛着を求める欲動）が特別な配慮を受け，ほしいままにさせてもらえる「甘える」ことに関する意識という形で保たれるのである。

また，「甘え」は，相互関係として，それを互いに実現しあうという形で現れる。つまり，与えることと受け取ることによって，「甘え」はやりとりされているのである。さらに，「甘え」とは，相手に対する受身的態度であるが，受身的態度そのものを進んで追い求めているという面もある。

このように，土居による「甘え」は，支持と愛情とを「受動的」に渇望して，世話や保護を言語的および非言語的に要求するという特徴を顕著に持っている (Johnson, 1993)。また，Johnson (1993) は，もう一つのきわめて重要な特徴は，多くの欧米の文化と違って，日本では「甘え」が幼い子どもの時期だけのものではなく，生涯を通じて，弱められはしても明白に認められたまま許容されるという点であると指摘している。

以上を踏まえると，日本では，甘える感情を非常に重視し，甘えることは日常の人間関係を円滑にする一つの重要因子だといえるのである。

2.「甘え」の多義性

さて，日本語においては甘えの心理を示すものとして，「甘える」という言葉以外にも多数の言葉がある。甘えられない心理に関係している言葉として，土居 (1971) は，「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」などをあげている。「すねる」のは，素直に甘えられないということから，すねながら甘えているともいえる。また，「ふてくされる」「やけくそになる」というのもすねた結果起きる現象であり，甘えの一種と捉えられている。「ひがむ」のは自分が不当な扱いを受けているとひねくれて解釈することで，自分の甘えの当てがはずれたことから生じるものである。「ひねくれる」は，甘えることをしないでかえって相手に背を向けることであるが，それはひそかに相手を意識してのことである。結局，甘えないように見えても，根本的には甘えがある。「うらむ」は，甘えが拒絶されたことで相手に敵意を向けることであるが，この敵意は甘えと絡み合った敵意であり，やはり甘えの心理である。

土居 (2001) も述べているように，これらはすべて何らかの形で相手につながっている，引っかかっているという点で一致しており，その意味でまさに甘えを志向しているのである。つまり，相手に対し不満などがあっても，それで相手との関係を切ろうとするのではなく辛うじて踏みとどまり，つながっているのが「すね」や「ひがみ」であり，その他前述のような心理なのである。

このように，表面的には甘えと無関係のように見えても，内面的には甘えを求めていると思われる心理がある。

以上のように，「甘え」は，多義性を伴った概念である。

3．素直な「甘え」と屈折した「甘え」

前述のように，「甘え」には多義性があり，これらを整理して，土居 (1971, 2001) は甘えには健康で素直な「甘え」と屈折した「甘え」があると述べている。

まず，健康で素直な「甘え」とは，相手との相互的な信頼に根ざした甘えである。それに対し，屈折した「甘え」とは，一方的に甘えを要求するという形をとった甘えである。つまり，屈折した甘えを持つ人は，甘えを与えることと受け取ることのバランスをとることができないのである。また，甘えの二重性を持たず，甘えたいけれど甘えられないという相反する心理の中で，甘え自体がアンビバレント（両価的）な性質を帯びているともいえる。健康な甘えというのは，相手が自分の方を向いて受け入れてくれるという感覚があって維持されるものである。逆に，屈折した「甘え」は，信頼の基礎がなく，いつ甘えられるかわからないし，いったん甘えられないとなるとまたいつ甘えられるようになるか分からないという点で，「甘え」は頼りなく，気まぐれなものとなる。つまり，「甘え」はその満足が全く相手次第で，傷つき易いという面を持っているのである。

このような甘えたいのに甘えられないという状況において「うらむ」という心情が起こる。そして，以上のように信頼に根ざしていない，「甘え」と「うらみ」が同時に存在する精神状態はアンビバレンス（相反する心理が同時に存在する）の原型であり，つまり，屈折した「甘え」とは，アンビバレンスであるといえるのである。

このように「甘え」には二つの異なった現れがあるのだが，土居 (1971) が述べているように，素直な「甘え」を求めているという点で根は一つである。ただ，信頼関係・相互関係に何らかの問題があった場合，素直に甘えられず「甘え」が屈折し，いつまでもそこに留まって先に進めなくなることも考えられる。「甘え」の病理とされる「気がすまない」「くやむ」などの病的な心理も，屈折した甘えが根づいた結果起きているのである。

健康な（素直な）「甘え」と，病的な（屈折した）「甘え」の問題については，小此木 (1966)，手塚 (1999)，西園 (1988) によっても，とりあげられている。

まず，小此木 (1966) は，甘えには自我の適応パターンである健康的な側面もあるとし，「甘え」は，「自我に奉仕する一時的・部分的退行」であるとしている。

また，手塚 (1999) は，健康的な甘えでは，状況に応じて甘えの表現を柔軟に調節したり，甘える役割と甘えさせる役割を柔軟に交代することによって，対人関係を円滑に進めることが可能になる。これに対して不健康な甘えでは，このような柔軟性が欠けるために，相手から期待する反応が得られず，甘え欲求が満たされないことが多いとしている。

西園 (1988) は，甘えさせる側は甘える相手を非難しつつも，ど

こかでその人を受け入れている部分があるし，甘える側は相手をとことん貪ろうとする強欲さはなく，相手にうまく依存しながら，ある程度の満足を手に入れるとし，健康な甘えに特徴的な部分性や穏やかさの要素を強調している。

つまり，これらを総合すると，健康な甘えとは柔軟性，一時性，部分性，穏やかさをもっているのに対し，不健康な甘えはそれらが欠けており，結果として極端で激しく，柔軟性を欠いた非適応的なものになっているのである。

このように，土居の屈折した甘えや不健康な甘えは，「甘える」やりとりの失敗であり，自分から与えることの出来ない，自己愛的で，他人に素直に依存することが出来ない状態が続いている成人にみられるかもしれないと，Johnson（1993）は述べている。

また，土居（2001）は，屈折した甘えはアンビバレンスの他にナルシシズムとも結びついていると述べている。つまり，屈折的甘えは，甘えをやりとりする際，相手との相互的信頼の基礎がなく，甘えたいのに甘えられないという，自己愛的な一種の欠乏状態を指すと考えられる。

以上のように，屈折した甘えは，甘えたいという欲求はあるがそれが受け入れられないという状態で，甘えたいのに甘えられず，甘えが一方的な要求がましい「すねる」「ひがむ」「ふてくされる」「くやしい」などの自己愛的な要求の形をとるのである。

なお，甘えたいのに甘えられないという甘えの変形した心理をあらわす屈折的甘えは，その甘えの追求が独りよがりで，相手と一体化しようとして極端に激しく自己の充足感を得ようとするものでなければ，程度の差はあっても全ての人に生じるといえるであろう。また，屈折的甘えを相手が一方的で要求がましいものと捉えなければ，それは甘えが成功したといえるのかもしれない。

しかし一方で，相手との信頼関係・相互関係に問題がある場合が多い屈折的甘えは，相手にしがみつくような一方的な激しさ，要求がましさを持ち，ナルシシズムなどの病的な心理の基底に存在すると考えられる。

Ⅲ　自己愛的甘えに関する理論

1．甘え理論と自己愛理論

前述のように精神分析において，自己愛ないしナルシシズムという概念は，Freudによる，精神分裂病をリビドー論で解釈しようとする試みからうまれた。彼は，対象関係からリビドーが撤退することがナルシシズムであると考えた。さらに，リビドーが自他の区別が未分化な時期に自我の中にこもっている状態を，「一次的ナルシシズム」とし，これに反して発達後，本来は対象に向けられるべきリビドーが自己へ充当された結果起きるものを，「二次的ナルシシズム」と呼んだ。したがって，Freudは自己愛の状態においては，対象関係は成立していないと考えたのである。

これに対しBalintは，前述のように，自己愛を対象関係論的に理解し，自己愛の発生は受身的対象愛（対象に愛されたいと思う心）が満たされないことに関係すると述べた。土居（1965）も，このBalintの一次的ナルシシズムを否定する考えは，自分自身の所論に近いとしている。また，土居（2000b）は，一次的ナルシシズムについてのFreudの説明に対し，矛盾があると指摘している。Freudは，幼児の一次的ナルシシズムは，直接の観察によって確かめることは難しいが，他の考察から演繹的に導き出すことはできるとし，愛情深い親たちが彼らの子供たちに向ける態度が，彼ら自身の，以前に（子供時代に）放棄されたナルシシズム（一次的ナルシシズム）が再生したものであるのではないかと，主張している。つまり，根本的には子供っぽい両親の愛情は，一見，対象愛に変貌しているようにみえるが，それ以前の性格（幼児の一次的ナルシシズム）を明白に示していると考察している。これは，親たちの子供たちに対する愛情深い態度に関する考察を用いた，リビドー論における基本の一つである幼児の一次的ナルシシズムについての説明である。土居（2000b）は，このFreudの説明を疑問視し，親たちの愛情深い態度は，昔のナルシシズムの再生というよりも，親自身にもともと愛されたい欲望があって，そのために子供に愛情深く接するのではないかと述べている。そして，Freudのナルシシズム理論によると，ナルシシズムとは自我にだけリビドーが向けられて他から閉鎖されている状態を指すにもかかわらず，このFreudの主張は，自我が他にリビドーを与えないのではなく，他からリビドーの供給を求める状態の存在を暗示しているとも述べている（土居，2000b）。このような点から，定義上ではナルシシズムは自己閉鎖的であるのに対し，これの証明としてフロイトが挙げる事実は，むしろいわゆるナルシシズムが密かに外界と関わり合い，外界に対しある欲求を持つことを示していると，土居（2000b）は指摘している。

さらに土居（1965）は，他動的・受動的愛（受身的対象愛）に基いたナルシシズムの再定義は，精神病理的現象を解明する上で，Freudの定義よりももっと効果的であるとした。土居（1965）は，愛されたい欲求，すなわち依存欲求は最も基本的なもので，それ自体本能的なものであるとし，愛されたい，甘えたいという欲求があるにも関わらず，依存欲求が満たされない時には，それが幼ければ幼いほど，甘えの対象を失い，本能衝動は現実的に満足させられないので自体性欲的また自己破壊的な現象が起こるとしている。また，この状態は現実との接触が全く失われた精神病の場合に相当すると述べている。もちろん，このような状態が幼い時，実際におきて継続すれば生存は不可能であるため，それを至急収拾しなければならないが，このようにして招来される結末がナルシシズムである。すなわち，このような痛みに耐えられず，心的防衛の結果生じたものがナルシシズムであり，この状態において自己充足感，または全能感の幻想が始まるのである。土居は，前述のような欲求不満が非常に早い場合に起きるときは，依存欲求が芽生えのなかに摘みとられるかまたは固定する危険があり，この場合は自他の区別があいまいで，自体性欲的また自己破壊的傾向を内蔵しており，精神病の素質となるナルシシズムであるとしている。次に，同じ幼時でも自他の区別ができて自己の観念がおぼろげながら成立し，甘えるということを十分知った後に欲求不満を経験するときは，自分に甘えまた自分を甘やかす状態が招来され，これは神経症の素質となるナルシシズムであると土居（1965）は述べている。このように土居は，ナルシシズムを，Freudの定義と異なって，常に二次的な形成物であるとした。

また，土居（1971，1997，2000a，2000b）は，屈折的「甘え」とナルシシズムとが密接な関連があることを指摘している。そして，

屈折した甘えは明らかにナルシスティックであるとも述べており（土居，1997），一種の精神的弱みや欠乏状態である自己愛的な状態は，甘えたいのに甘えられない，一方的で要求がましい性質をもった屈折した甘えの心理に近いのである。

2．自己愛的甘えの理論と構造

これらのことから，屈折的甘えは「自己愛的甘え」ともいえるのであるが，土居（2001）は精神的弱みや欠乏状態を，自己愛的またはナルシスティックと形容詞として使われることが注目すべき点であると述べている。そして，Freudのいう自己愛の概念と，自己愛的と形容詞的に用いられるものとを区別した。土居（2000b）によると，Freudの自己愛という概念は，成長した人間がこの幼児的な状態に退行すれば病理的なものであるとされているが，その一方で正常の自尊心または理想我の形成の基礎ともなるとしている。つまり，もともとは同性愛・分裂病の特性を説明するために造られた自己愛の概念が同時に正常の理想的な状態を指しているのである。

このことは，概念の混乱を招くとして，土居（2000b）も批判している。土居（2001）は自己愛的というのは，単に正しく自己を愛することとは違い，自己中心的，利己的なものであり，それはどのように利己的であるのかというと，精神的な弱みからくる欠乏状態によって，対象関係において，わがままで要求がましい状態を伴うとしている。つまり，Freudの定義した自己愛の概念が病理的なものと正常な理想的な状態の二重の意味を持ち，矛盾が生じているのに対し，前述のように形容詞的に自己愛的と表現することで，それが精神的な弱みをさしているというということが一義的に定まるのである。

また，自己愛的要求という表現も専門家の間で日常的に使われており，これは，何か特に自分にしてもらいたいことがある場合，そのような要求を指して言うとされている（土居，2001）。そして，土居（2001）は，一方的で要求がましいのが「自己愛的甘え」の特徴であるとしている。さらに，健康な甘えが非言語的で，本人に「甘えている」という自覚がないのに比べて，自己愛的甘えは，「甘えたい」欲求として甘えが自覚される。このような要求がましく一方的な性質を持つ自己愛的心理は，自分に対する誇大性の心理というよりも，「甘えたい」願望を他者が満たしてくれることを一方的に要求するというような，自己愛的要求を伴う関係性の中での誇大性として表れてくると考えられよう。

以上のことから，ナルシシズムは，受身的対象愛が満たされないことによる二次的産物であり，それは「甘え」が満たされない，甘えたくとも甘えられないが故に自己愛的要求を伴う，「自己愛的甘え」に相当すると考えられる。また，これによってFreudの概念に基いた自己愛理論では説明しきれなかった自己愛の特性が説明できるといえる。つまり，愛されたい欲求（甘えの欲求）が満たされない時に，その欲求不満の結果として，ナルシシズムが周囲に対して自己愛的要求を持つようになるということが，ナルシシズムを「自己愛的甘え」と再定義することで明らかになると考えられる。

そこで稲垣（2004）は，自己愛的甘え概念を，「屈折的甘え」「配慮の要求」「許容への過度の期待」の３つの下位概念に整理した。そして，その３つの下位概念に対応する項目群からなる自己愛的甘え尺度を作成し，探索的因子分析（主因子法・Promax回転）及び確認的因子分析によって，この3因子構造を確認した。自己愛的甘え尺度は以下の三つの概念を測定するものである。

①「屈折的甘え」

谷（2000）は，「甘え」尺度を作成し，「甘え」の構造について因子分析の結果から，「甘え」概念は，「直接的甘え」「屈折的甘え」「とらわれ」の３因子構造からなることを明らかにした。この３因子の中の「屈折的甘え」は，土居（1997）の「屈折した甘え」に対応するものである。土居（1971，2000a，2000b）は，この「屈折した甘え」は，自己愛的であると指摘している。そして，「甘えたいのに甘えられない」「他者に自分を認めてもらいたい」という基本的欲動が転換し，不機嫌（すねる），軽い被害妄想（ひがみ），公然とした敵意（ふてくされる），屈辱（くやしい）などの形態をとる。このように，「屈折的甘え」は，甘えをやりとりする際，相手との相互的信頼の基礎がなく，甘えたいのに甘えられないという，自己愛的な一種の欠乏状態を指すと考えられる。また，甘えたいという欲求はあるが，それが受け入れられないという状態で，甘えたいのに甘えられず，甘えが一方的で要求がましい，自己愛的な要求の形をとる。

②「配慮の要求」

他者からの特別の配慮を受けるに値すると感じ，そのような配慮が得られないと不満や怒りを感じやすい傾向である。そして，このような傾向の背後には特別な配慮がないと心理的安定や自己評価を保てないという脆弱性とともに，ある種の特権意識や誇大性が存在している。これは，露骨な優越感や自己顕示とは異なる形での誇大性の現れである。

日本社会においては，意識の二重構造が土居（2000b）によって指摘されているが，これは，建前（外面・表）と本音（裏・個人の主観性）を区別する意識のことである。そして，日本社会においては，本音を読み取るには，つまり建前の下に潜むものを推定する為には，他人の隠された動機，情動を判断する共感や洞察力が必要である。そして，これらを読み取り，首尾よくやっていく力が，日本における心理社会的能力や洗練度の指標となる（Johnson，1993）のである。

このような，「表現されない意識に気付くこと」は，「配慮」といえるが，これを適度に他人とやり取りすることで「存在意義を認められている」という実感を持つのではないだろうか。しかし，周囲とそのやりとりのバランスが崩れたり，また，周囲がそうした期待に応じてくれないと自己は満たされず，不満や怒りを感じることになる。これは，「自分はもっと配慮されるべき人間である」という誇大的自己イメージや，自己をはっきりと主張していないにも関わらず，存在意義が認められたり，賛同されるだけでは足りず，取り巻きによって特別にちやほやされることを求めている。

③許容への過度の期待

山口（1999）は，「不適切な行動」に，それが許容されるとの「期待」が加わったとき，それを「甘え」と呼ぶとしている。そして，ここでいう「不適切な行動」とは，その人の年齢や置かれた状況などからすべきではないことをしたり，すべきことをしないことである。そして，この行動は，自己利益の為に行われているとみな

されるものである。

つまり，「甘え」とは，「不適切な行動を許容されると期待すること」である。しかし，その傾向が極度になった場合，つまり，「どんなに不適切な自分でも認められて当然だろう。」「自分の不適切さの為にどんなに人に迷惑をかけても許してもらえるだろう。」といった期待を持つ人は，依存関係において情緒的・社会発達の初期の段階にとどまっている。つまり，母親との一体化の関係から抜け出せていない状態かもしれない。

日本の文化は甘えや依存に許容的であるので，彼らは日本の社会で何とかやっていけるかもしれない。しかし，社会の枠の中で一応は機能できても，大人になりきれず，「いつも誰かがなんとかしてくれる。」「どんな不適切な行為も結局は許してもらえる。」という，受身的で，なおかつ他人に多くを要求する態度を取り続けるのである。彼らは，甘えの対象を特定せず，他人との，甘え的，自己愛的一体感を求めたり，ほしいままにさせてもらうのが当然だというような意識を持っている。

このような執拗で露骨な「甘える」欲求は，成長途中の子どもの，何でも欲しがる，しがみつくような頑固なふるまいに似ている。そして，依存関係の中で，度を越えた助力や，特別扱いを要求しても許されるだろうという態度で周りの人々に接するようになる。

以上のように，稲垣（2004）は，「屈折的甘え」「配慮の要求」「許容への過度の期待」から自己愛的甘えを捉えうることを示唆した。

また，自己愛的甘えの概念を通して理解できる現代社会の風潮として，土居（2004）は，人間関係が一般的に稀薄に，または一方的になってきていることをあげており，このような現代社会の特徴を自己愛的であると述べている。つまり，人間は独りでは生きていけないのであり，家族や地域，国家など，周囲によって支えられ，世話になっているのであるが，現代人はそのことに気付かないことが多く，その結果，周囲にひどく依存していながら依存の事実を素直に認められない。また依存している事実にたとえ気付いていても，そのことに自己嫌悪を感じたり，他人の評価をひどく気にすることがしばしばあると，土居（2004）は述べている。この現代人の自己愛的特徴は，自己愛的甘えの概念を通して理解できるといえる。

現代社会における自己愛的な人は，たとえ周囲にひどく依存している状況であっても，それを認めないために甘えの欲求はいつまでも満たされないのではないだろうか。そしてその結果，甘えは自己愛的な要求の形をとると考えられる。この甘えは，相手があって甘えている素直な甘えではない，誰と関わるかという相互関係とは無関係にただ甘えることだけを求める，一方的で要求がましい甘えである。

このように，現代の人間関係における特徴として考えられるナルシシズムの問題も，自己愛的甘えを通して考えることによって，より理解が深まるのではないかと思われる。

Ⅳ　「甘え」理論の広がりと自己愛的甘えの問題

1．「甘え」の二重性

「甘える」ということを是認される創造的なやりとりの方向に，バランスをとりながらもっていくことが，心理社会的な目標を達成するにつれて自己が成長していくことであるとJohnson（1993）は述べている。

例えば，甘えは「甘えの二重性」を持つか持たないかが，甘えの健康度を規定する一つの重要な要素になる（水田，1999）。土居（1971）によると，甘えとは分離の事実を否定し，分離の痛みを止揚することである。つまり，「対象と一体ではないことはよくわかっていながら，心のどこかでは対象との分離を否定している」心と，「対象と一体であると感じながら，同時に心のどこかではそうではない（対象と一体ではない）ことがわかっている」という心の相反する二つの心的態勢の同時的な共存である。水田（1999）は，この甘えの二重性の理論に基いて，健康な甘えを「甘えの中のあきらめとあきらめの中の甘え」と定義した（水田，1999）。分離を否定する心的態勢（甘えの態勢）をAとし，分離を認める心的態勢（甘えない態勢）をBとすると，甘えの二重性とは，Aが優勢な時にもBは心のどこかに位置を占めており，分離は幻想的，妄想的に否定されたままになることはない。また，Bが優勢な時には，その状態は，あきらめと捉えられることが多いが，Bのどこかには Aが意識されており，Bに伴う痛みや悲しみの感情は和らげられるというものなのである。甘えが非適応的となる場合，「甘え」と「あきらめ」を対極に位置づけ，両立不能になっているという状態なのである。

2．「甘え」のあきらめと錯覚―脱錯覚論

土居によれば，前述のように，素直な甘えは，甘えの二重性（対象と一体であると感じながら，同時に心のどこかではそうではない（対象と一体ではない）ことがわかっている）を持つ。また，水田（1999）の述べるように，健康な甘えとは「甘えの中のあきらめとあきらめのなかの甘え」と定義される。それに対して甘えが非適応的となる場合（屈折した，自己愛的甘え），「甘え」と「あきらめ」を対極に位置付け，両立不能になっているという状態である。

このように，「甘え」の心理はもともと分離を前提としており，「甘え」によって相手と合一することは不可能なのだという，空虚感・幻滅を伴うことのない「甘え」のあきらめができるかどうかということが重要な観点であると考えられる。

さて，Winnicottは，英国対象関係論学派の代表的な存在で，小児科医であると同時に精神分析科医でもある。彼の理論体系の中核は，早期乳幼児期の発達理論にある。

Winnicott（1965）は，母と子の一者関係から二者関係への移行期（移行対象との関係）の世界を解明した。彼の述べる「乳幼児の依存の諸段階」の第一段階（絶対的依存の段階）では，乳幼児は母親に全く受身的に依存しており，母親の役割は「抱きかかえること（holding）」であるとしている。この役割は，「乳児の求めるものを適切に読み取って，適切なときに与える母親の乳児に対する適応（living or sensitive adaptation to infant's need）や，「母親または環境からの供給（maternal or environmental provision）などの機能を総括したものである。土居（2002）は，この「抱きかかえること（holding）」の考え方が，「甘え」と非常に近いと述べている。

小此木（2003）によれば，Winnicottのいう成熟過程とは，一者関係，つまりFreudのいう一次的自己愛の状態（自他の区別が未分化で，客観的な自己と母親との依存関係は認知されていない状態）

から，二者関係，つまり自己と区別される全体的な対象としての母親像が確立し，環境としての母親（外的対象としての母親で，外に存在する依存の対象としての母親）と対象としての母親（乳幼児の内的な世界における主観的な対象としての母親）が一致してゆく状態への発達である。その発達過程は，Ⅰ．まず，絶対的な依存の段階の幼児は主観的な経験の中で，対象と関係する。このような主観的対象は幼児の側の主観投影を含み，幼児の全能的な支配下に置かれている。Ⅱ．ところが，次の相対的依存の段階に至ると，対象がこの全能的支配のままにならないこと（母親が幼児の欲求に適応することに失敗すること）が経験される。しかも，幼児はこの欲求不満によって対象に対して攻撃性を向ける。Ⅲ．しかし，幼児のこうした対象への主観的破壊にもかかわらず，客観的対象は生き残る。この経験を通して，自己の全能的支配を越えた存在としての外的対象が確立されるのである。

この中で彼のいう対象に関する「錯覚」とは，自分にとって良いものを全て自分のものと幻想する自己愛的段階から，自分から独立した自分の思いどおりにならない客観的な外的存在でもある良い対象を，同時に主観的に自分のものとして知覚する体験である。外的な対象をあたかも自分の感情や願望を満たす存在であるかのように錯覚する「万能の錯覚（illusion of omnipotence）」は，やがて乳児の側に現実検討能力が発達すると，そのような錯覚からの「脱錯覚」が進む。このような「脱錯覚」のプロセスで，欲求不満が生じるが，このようにして乳幼児の自我は現実を受容する段階に発達してゆく。

北山（1985，2001）は，この過程が急激で，取り返しがつかず外傷的な場合は「幻滅」，現実への関心を失わない形の順調な移行の場合は「脱錯覚」とよんでいる。またRycroft（1968）も，正常の幻滅とは現実を支配できるという万能感についての幻滅だとして，外界についての関心を失う幻滅と区別している。

この過程は，全能感から現実感への成熟過程ともいえるが，この現象は，土居（1965）のナルシシズムと甘えとの関係の中でも共通するものがみられる。彼は，病的なナルシシズムが依存欲求の不満に由来するとするならば，健康な自己愛は依存欲求の心の満足ないし，その克服を契機として生ずると述べている。また，それは低い段階での依存の満足にとどまらず，したがって単なる甘えを超えて信頼のなかに自分は愛されているという確信を持つことであると述べている。さらに，自己の発見は，「甘えられない」という苦い経験を契機としておきることもあるが，もしそれだけで愛と信頼を経験しないならば，そのような自己はナルシシズム的自己となるとしている。そして，その結果「甘え」が自己愛的甘えにならざるを得ないのである。

世界の中心であった乳児のニードである「錯覚」は，「脱錯覚」を通して，願い，希望，そして信頼という価値的なものへと転化することが見込まれる（北山，1985）が，前述したように，「甘え」においても「甘えへのあきらめ」を経験しながらもそれは愛と信頼を経験し，「甘え」を知った上でその依存欲求を克服していく過程が，健康的で素直な「甘え」を形成する基盤になると考えられる。

さて，Winnicottによれば，「錯覚」と「脱錯覚」を繰り返す，外的現実と内的現実の中間領域は，遊びや文化的活動へと発展してゆき，この中間領域によって，「脱錯覚」は，対象喪失の外傷を伴う「幻滅」とはならず，現実の価値や希望，楽しみを失わないものとなるのである。「錯覚」から「脱錯覚」への小さい移行と中間領域には，何が子ども自身の主観により創造されたのか，あるいは何が外から与えられた現実として受け入れられるのか，というような二分法を問われないという特徴があるが（北山，1985），これは，「甘え」の概念においても同じようなことがいえる。

つまり，健康的で素直な甘えは，Winnicottのいう中間領域的な要素を持っていると考えられる。そして，このような要素がなければ，「甘え」と「あきらめ」は対極に位置付けられ，両立不能になり，外傷的体験を伴った「幻滅」としての「甘え」のあきらめとなり，「甘え」は自己愛的になるのである。

3．本当の自己と偽りの自己

前述のように，「錯覚」は常に現実検討によって「脱錯覚」に至る可逆性を持っている。この過程で，Winnicottは現実検討を受ける可能性がなく，パーソナリティ全体に統合されることもないという，「空想すること」が，解離の現象として起こると述べた。解離は，まず第一に発達初期の未統合な自然の心性としてとらえられ，二次的には，現実の否認や主観的な全能感を維持する自我の防衛の意味を持っている。この二次的な防衛規制としての解離は，成熟過程で生じる基本的なものとしては，本当の自己と偽りの自己の解離である。

牛島（1995）によれば，本当の自己では，母親に絶対的に依存しているなかで，母親が幼児の求めるものを察知して適切に満たしてあげることが基盤になっている。それは，ただ単なる欲求の満足ではなく，察知や満足のさせ方まで含めた母親全体を乳児が取り入れるという過程を必要とする。これは自発的，内発的なものを母親の表現手段を借用しながら表現するようになる幼児の姿の土壌であり，さらには幼児は全くの受身の位置から主体性を持った自分となり，主体的に環境と関係を結ぶ状況が出現する。このように，本当の自己は自発的な身振りによって表現され，現実感を持ち，創造的であり，健康な自己愛の基盤となる。同時に，主観的な自己は，「錯覚」と「脱錯覚」の繰り返しのなかで客観性を帯び，対象の変化に見合った自己の発達を遂げてゆくのである。牛島（1995）は，こうした構造を基盤にしてはじめて人間は，自らの存在感を実感できるのであり，成長が進むほどに，つまり大人になるほどに，外界に接する部分はより客観性を帯び，内奥になればなるほど，より主観的自己と主観的に知覚されている対象が優勢になると述べている。また，この本当の自己の部分は自己中心的ではあるが，実在感を与える中核部分となると指摘しており，特に遊びや文化活動などの中間的領域において顔を出すような構造になっているという。

土居（2000b）によると，「自分」の意識は，甘える関係の中に埋没して失われていた自分を，甘えていた対象から分離して見つめるところに生起すると述べている。そして，「自分を大事にしなければならない」というような自分に対する積極的な感情も含んでいる。この「自分がある」という意識は，「自分が出来る」過程で相手との相互的な信頼を軸にした甘えのもとで素直な甘えを共有するという経験を持っており，土居のいう「自分」は，Winnicottの述

べた本当の自己に相当すると考えられる。また，この本当の自己の中で素直な甘えがやり取りされると考えられる。

これに対して，母親からの適切な自我支持を与えられなかった偽りの自己がパーソナリティを支配するようになると，自分の自発性を完全に隠蔽した，物真似や環境への服従，迎合や拒絶による偽りの関係が繰り返されるようになる（牛島，1995）。偽りの自己が正常な場合には，本当の自己を守るような社交的態度となるが，これが極端な場合には，偽りの自己がその人そのものになり，本当の自己は周囲にも自己にも隠され，空しさと絶望の感覚が大きくなり，対人関係の中で破綻を生じ，その恐怖にさらされるという危険がある。さらに，そのような偽りの自己を形成した人格は，外部との連絡（外部との客観的な関わり）がないままに，隔絶されているので，実在感を体験できず，真の遊びも文化活動も出来ないままに終わるのである（牛島，1995）。

前述のように，健康的で素直な甘えが中間領域的な要素を持っているのに対し，このような中間領域が持てないという状況は，「甘え」の概念からみれば，「自己愛的甘え」になると考えられる。「甘え」があることが実感できない，つまり，本当の自己を経験できない，「自分がない」ということが，対象によって自分自身が左右されるというような偽りの自己に支配された人格を形成し，対象に対する「甘え」が自己愛的になるのである。

以上のように，素直な甘えは，甘えていた対象から分離して自分を見つめることができる，「自分がある」という意識や主体性を伴って形成される，本当の自己を基盤にしているともいえるのである。それに対して，偽りの自己がその人そのものになってしまうと，自己は主体性をなくし，対象によって自分自身が左右され，「甘え」は自己愛的甘えになるのである。

4．信頼・落ち着きと「甘え」

これまで，素直な甘えには，甘えのあきらめ（脱錯覚），甘えがあることが自覚できているか（本当の自己の形成）という過程が重要であることを述べてきたが，脱錯覚や，本当の自己の形成に必要な中間領域は，素直な甘えの根底にあるとされている信頼や落ち着きにつながると考えられる。よって，次に健康的な甘えの基盤となる相互信頼と，「落ち着く」という心理について触れる。

土居（1965）は，自己の発見は，甘えられないという体験を契機にして起こるが，それは，信頼を経験しないならば，そのような自己はナルシシズム的自己となると述べている。

つまり，自我が他者喪失の痛みを体験した時に，信頼というものそれ自体が，その痛みへの防御として用いられるのである。

さらに精神分析の中で，対象関係理論においては，親の役割にはまず第一に，一体感幻想，あるいは良い関係を踏まえて「きずな」や対象との基本的信頼を育てることにあり，その後，一体感幻想や基本的信頼関係という理想化された関係は，時間とともに，ほどよく非外傷的に幻滅するとされている（北山，2001）。また，土居（1965）は，母子間の信頼関係は，乳児が甘えを経過した後，母親からしばらく離れることに耐えることを学ぶに至った際，成立することが出来ると述べ，乳児は単に母親に甘えるだけでなく，母親を信頼するようになり，母親もまた乳児を信頼し，そこに乳児の健康な自我の基盤が作られるとした。さらに，このような安心できる人間関係の中に身をおいている状態における「甘え」を，土居（2001）は，信頼に裏打ちされた「甘え」と述べており，それは，「落ち着く」心理を含んでいると述べている。つまり，本当に落ち着ける場合は，自覚していないかもしれないが，誰か身近な者に甘えられている場合であるということができる。なお「落ち着いた人」というようにこの語を人間の形容として使うことがあるが，このような人は実際に落ち着く場所を持っているというよりも，内的に落ちつくところを持っていると考えられ，言い換えれば，このような人は身近なところに甘える対象がなくても，精神内界に甘える対象を持っているので，どこに居ても落ち着いた状態を維持できると考えられる（土居，2001）のである。

一方で，信頼関係が成立しないか，成立しても微弱の時は，依頼心は強いが，信頼心は乏しいという，自己愛的甘えの現象が起きると土居（1965）は述べている。また，人間関係の基本に信頼や安心が欠けていると，「落ち着きがない」状態になり，土居（2001）は，このような人たちは結局甘えられないので悩んでいるということができるだろうと述べている。また，甘えたとしても両価的であるという，自己愛的甘えになるので，真の意味で満足が得られない。土居（2001）は，現代において，落ち着きのない人，自分の居場所がない，居心地が悪いと訴える人が非常に多いと述べている。

以上のように，素直な甘えは，人間関係の基本に信頼や安心があり，相互的な信頼を軸にしており，「落ち着く」心理を含んでいるのである。そして，そのような心理を基盤にして，利己的で要求がましく，一方的な自己愛的甘えから脱却する（「いつまでも甘えていられない，自分を大事にしなくてはいけない。」と自覚する）ことが，素直で健康的な甘えにつながると考えられる。

V　最後に

このように，ナルシシズムを「自己愛的甘え」と再定義することで，Freudの概念に基づいた自己愛理論では説明しきれなかった，自己愛の特性を説明できる。また，「自己愛的甘え」とは，Winnicottのいう中間領域的な要素を持たず，外傷体験を伴った「幻滅」としての「甘え」のあきらめとなっており，偽りの自己が主体となって，自己は主体性をなくし，対象によって自分自身が左右されている「自分がない」状態である。そして，人間関係の基本に信頼や安心が欠けており，依頼心は強いが，信頼心は乏しく「落ち着きがない」状態で，甘えられなくて悩んでいるか，甘えたとしても利己的で要求がましく，一方的な甘えになるのである。

以上のように，自己愛的甘えは広がりをもった概念であり，精神的な事象及び病理の説明において，重要な概念になるであろう。

謝　辞

本研究論文を作成するにあたって，丁寧なご指導を賜りました神戸大学発達科学部助教授　谷　冬彦先生に心から感謝申し上げます。

引用文献

バリント，M．森　茂起・枡矢和子・中井久夫（共訳）1999　一次愛と精神分析技法　みすず書房（Balint，M．1952 *Critical*

Notes on the Theory of the Pregenital Organizations of the Libido, Primary Love and Psychoanalytic Technique, London : The Hogarth Press.)

土居健郎　1965　精神分析と精神病理　医学書院

土居健郎　1971　「甘え」の構造　弘文堂

土居健郎　1997　「甘え」理論と精神分析療法　金剛出版

土居健郎　2000a　土居健郎選集2　「甘え」理論の展開 岩波書店

土居健郎　2000b　土居健郎選集1　精神病理の力学　岩波書店

土居健郎　2001　続「甘え」の構造　弘文堂

土居健郎　2002　甘え　小此木啓吾（編）　精神分析事典　岩崎学術出版　Pp. 9-10.

土居健郎　2004　精神分析と文化の関連をめぐって　精神分析研究 **48**, 85-93.

Ferenczi, S. 1924 *Thalassa : A theory of genitality*, New York : Psycho-analysis. Quarterly Inc.

Freud, S. 1900 *The interpretation of dreams*. S.E., 4-5 （高橋義孝（訳）1955　夢判断　上・下　フロイト選集11, 12 日本教文社）

Freud, S. 1911 *Formulations on the two priniples of mental functioning*. S.E., 12 : 218-226, London : Hogarth Press, 1958 （井村恒郎（訳）1970 「精神現象のニ原則に関する定式」 フロイト著作集6 人文書院 Pp. 36-41.）

稲垣実果　2004　日本的自己愛の構造に関する研究　日本心理学会第68回大会発表論文集, **68**.

Johnson, F.A., 1993 *Dependency and Japanese Socialization : Psychoanalytic and Anthropological Investigation into AMAE*, New York : New York University Press. (江口重幸・五木田紳（共訳）1997 「甘え」と依存—精神分析学的・人類学的研究— 弘文堂)

北山　修　1985　錯覚と脱錯覚—ウィニコットの臨床感覚　岩崎学術出版

北山　修　2001　幻滅論　みすず書房

水田一郎　1999　青年期患者と甘えの二重性　北山　修（編）「甘え」について考える　星和書店　Pp. 147-161.

西園昌久　1988　甘えの二重構造—母子関係理論への提言—　精神分析研究　**31**, 1-33.

岡野憲一郎　1998　恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで—　岩崎学術出版社

小此木啓吾　1985　現代精神分析の基礎理論　弘文堂

小此木啓吾　2003　精神分析の中のウィニコット　妙木浩之（編）ウィニコットの世界　至文堂　Pp. 82-104.

ライクロフト, C. 神田橋條治・石川　元（共訳）1979　想像と現実　岩崎学術出版社（Rycroft, C. 1968 *Inagination and Reality*, London : The Hogarth Press.）

谷　冬彦　2000　青年期における「甘え」の構造　相模女子大学紀要　**63A**, 1−8.

手塚千鶴子　1999　セラピーにおける「甘え」と言葉—ある個人的体験をめぐっての一考察—　北山　修（編）「甘え」について考える　星和書店　Pp. 67-82.

牛島定信　1995　ウィニコットとプレエディパルな世界　小此木啓吾・妙木浩之（編）精神分析の現在　至文堂　Pp. 123-133.

渡辺智英夫　1995　英国中間学派の仕事—バリントなど　小此木啓吾・妙木浩之（編）精神分析の現在　至文堂　Pp. 145-153.

ウィニコット, D. W.　牛島定信（訳）　1977　情緒発達の精神分析理論－自我の芽生えと母なるもの－　岩崎学術出版社（Winnicott, D. W. 1965 *The maturational processes and the facilitating environment*, London : The Hogarth Press.）

山口　勧　1999　日常語としての「甘え」から考える　北山　修（編）「甘え」について考える　星和書店　Pp. 31-45.